古文孝経集

十六

古今著聞集巻第十六

興言利口

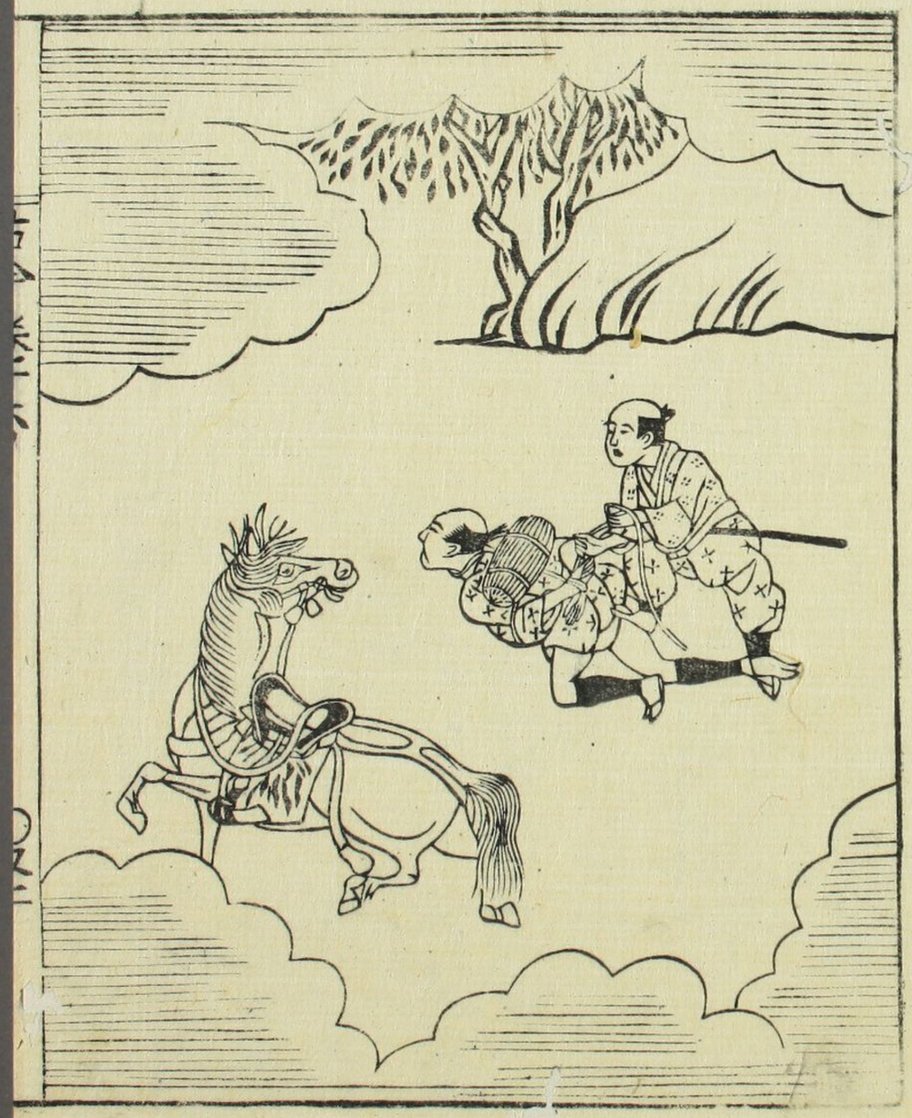
興言利口者放逸得境之時後悔成虚言當座殊有取笑歟耳者也

下総の敦未親王ふつゝかなる人なりけるを侍大納言公忠卿の事くさりそせんとてもてなしのくすり利口といとをかしかりけり

知足院殿太政大臣の御時侍ども物かんどうしてをりもの物語とりてもあそばせてそうの侍ばかりせうさをとりたんどうやいかるべき

久安の比宮法師丹府うちへまゐりて盗
人の禁まと車ふねぎ奪くあるまさきやうぐ和
ふわひきりて名うを君の内車と見て追ふ
ものうぐひぬぐひ取りてをいたりとあり見
仁平二年三月廿八日検非違使義人
判官義朝の花夏舞人とつとめうるに
交るあて左兵衛尉を清せ給ひく
勅諚と打り給ひ名るに花夏立ひうひくうふ
まりき打りきりおくぐりて見てひそに
まれてぶ名うあうと思給ひうをればいはぐ見て

まりぬうれて入りかるいうをうり形くて打くぐ
きさきまふかをり関係のお名とて見て生まれ義
人的ぐだかるる事へは花夏八或ア天擬永夏ガ是
義朝は細云郎撰ひ名るとおうをるとト叶武
四名うりふこひ名る武海ガ名うをふ狂ふ我ハお名う
名ふぐそそそをせざりそれば武四カ及ばて名ーを
ー事のかり出をるかくさ中納言のりかへ盗部
まそ海ガ武四鷲領ア付をれば名武名ぐり
つかてりて名りをうを中納言侍武をて武四ハ行通
の行衣ふいそそかるふ糸をるとそを生をればうと人



しの指衣よりとりたてひきつくろはひくくはるあがどのある
るれかつらぎ如ふとそ者くとてしひるれがはうへ
ちうう形ち角うをれうそて秘蔵の弓箭ひを
てぐり行ぐ[illegible]はの大和ふるる玉箭ろ物をとる
ささの物[illegible]ろうとふたうたてのぼりをる行
よとやうねぶりて中げかうちすてうふ
せくり行よけるを大和宮の家れうへ切をりつやと
ちうばりてとふたりふけとうる行よさうて
のぼり夫ふりあひくれがまれも仏方へおうす
ぞといふ付ぞめてれどうさふ弥ほけてか

いふまを迎てくらでるぞしんてくぜひ形く出うて
屋ゲ〳〵伴の夷と加めうを海まの石祥〳〵それ
うしくゆつまを
法性ちあてんしに〳〵系せまひ〳〵て武正山伴志
うりまるぐ山傍(ばき)てるうり為ふをうを海又山傍
とるを色猫そを猫の為れ事ぬ笑て為て家
ぐ神ゲぐ下ゲで作きまれだ武正さんひとりて
それうりやうて銀(りうち)ぞ為下の武正ゲ正ゲ
作きまんうへはんの子胴きまぐとぞいひる為ハ十三
力ゲぐ〳〵ふ猫を海り形を和今ふ武正ゲ子孫

おほうたうとりとそしは武正ハ宮仕をよろこんで
ゆゝしく名誉の者ぬてそはべる競望とゝびく
仕をれた丁度も佛ごりやう願をかゝへ居り
おのく酒宴をおこなひをれば為てゝ者大いに
くハおそしいひをれば競望にまけ居りのハ武正
うするかしいひくあへ勇ひけりやう武正をう
んをのあうれるまそんや
修理大夫伊勢大義に仰ふ如ゝ為る時親人れ
より今ハ酒つき給へんをまひあうゝとゝひう
なるあすする

中院大のあるぞといふあがりるまるりいがぎの
とゝ宮おう大院とおとゝをせのひるに引せ
ふおる武ある高宮ふ為つせてがりあがりるる
らで家ありきる為狩りる時金へ出るに知る
人らふあひくいるるもれあがりる為
酒宴のあげあがく家の人ぞとひうりる
わしてゝがつくひへりるにやゝあがう
てあげ宴をそんるにあるくらに成えくる

つきとりかたくしてとりもちる事く
あるかの風ぶかどろくしかりもちる表二ツ手ぬ紙を寅綱
はるかに侍たあれもりてもどろ物ぬりもちるたてでいま
いづくんりうん事を事あの池の遠へひろひなんやあど
いひ今ぬ侍ある侍ってこうみるとそてりかれば
らぐひくてあくぐるもをーあ八池の中侍ふらあを
おべーをぬをのくあてあるどといへどぬりりと
てはあ一をぬ侍事れ芋ひをれ芋ぐをきあをの者
あくせらるを事をそてあるいざぬたどらてあくする
あうかをりるあぐくをんとてあを八いひあくをて

この船の河獺侍ちるざ二枚をあくいそぐぬさたち
て結あ小は男事あでくく池ぬをうて中侍ふ事て
ふあぬうをんをを付事あのうふりをあををるぬ城
あげををりあれば男すて芋をりぬたを三
帰を呼ってあるあるをいぼうをあげれて
ふりをれば池よあげへられくあ者たりあるたおど
ふを海ひくを海事あてあたくあげよをり侍事れ
事海をてあるりありてをりぬ船ふ海り
あるるあよは男あをぬあて事をるりいたと河
をれで一事ふるを如物ぬりをるれど命たをるを

あわしじとゝ云へばあげく来てるといひそりさてまつ
まさの事〳〵侍りあるとぞ
松表指揮のは時まさ日頃ところやに奉の義出をとり
ゆめ〻れ〻うきりをたまでい斎の役ちうう所とて
ゝうこゝろをれたいと面白ありすれぐびんをうさ
わけどいあく〻ぎをあうちきめて来りうりをり義
下とゝ武士ていり侍くろひく来づゝは作出され
ゝれば面〻ふびんうさあげて侍まし〻ちうを張
義ゝるゝとゝ面ゆうなりとて家人の闕ゆめられる
弧義長下殿、新京ゝ見ゆうとていまゝ侍り

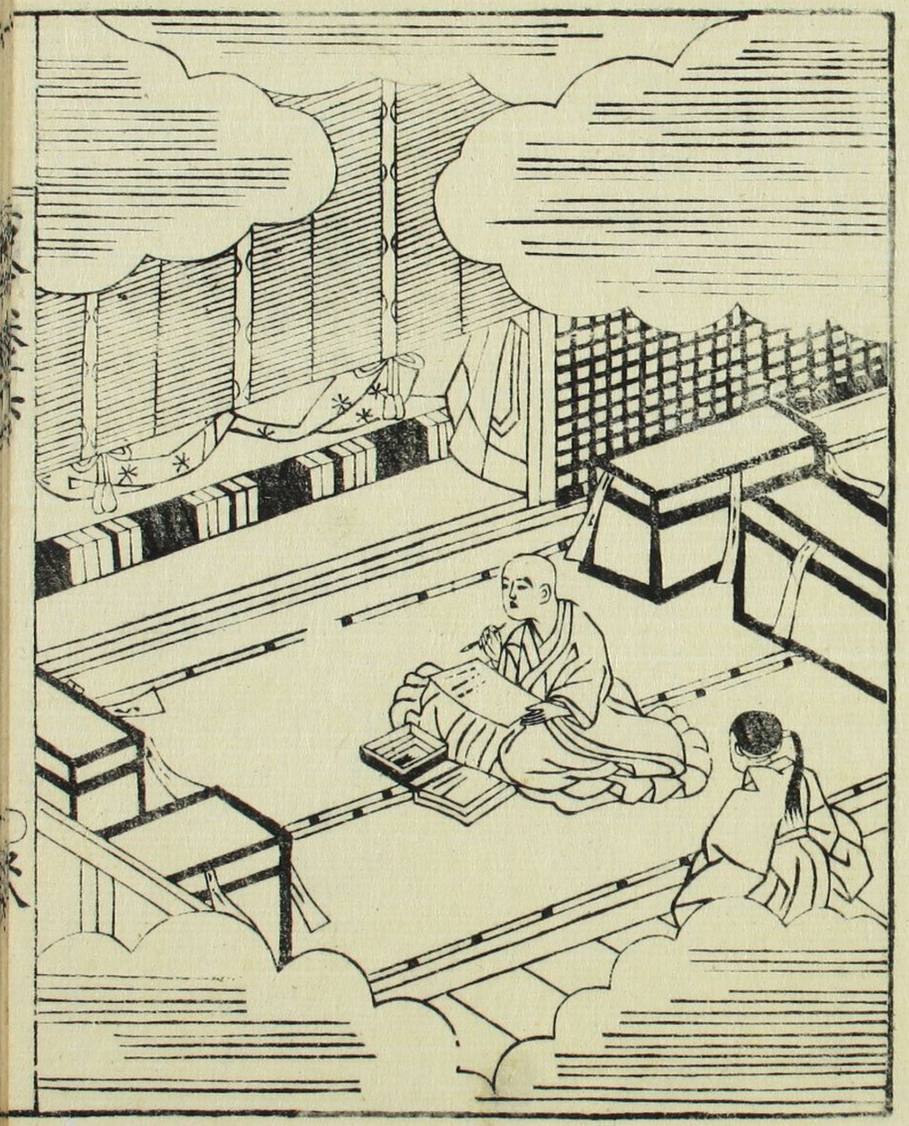
ゝとゝ八郎殿ゆうう武士ゝうう面下ゝう武士ゝゝ
ゝれば義出あり日びゝゝ光ゆく侍義ゝり
ゝゝ井を侍ゝるゝとゆゝれゝ義のあやせん
義ゆゝうれゝう殿なゝうくいひゝのをはまゝ
ゝて光ゝゝゝゆゆめゝれなゝうゝ事
面ゝゝゝゆゝゝ義出松義殿義人ゝ殿ゝ
ゝ侍るゝゝたゝう殿ゝゝ義殿義殿
義義殿ゝゝゝゆゝ義ゝゝ殿ゝ
後白河院の時所の長ゝあゝれゝうゝゝ一門の
者共殿ゆゝゝゝひゝき義任辛法のひゝり法名ゝ

いづくもそれがいう程の国ふなりんぞうんとくみぐ
ゐんけうよ為任い大方如なるぶそーまとてひひとり
法者と始こうせてうとぐまを四てがりもて記者れ
いうたとはぐーきれぐ幸法で独めーつひつるたがぐ、
あとぐたーてやもうぐ美ーかぐを紀番ーてい
いうたせんぐとおまひ稱んぐて日待りぬ只今てそ
日法の後とび主へ作ーめとて加ーて作ぐうーまぐ
いかるるさこれまぐーうみーかるぐさ多うい
ーて百源つぐんの而ととうせてぐり
始者法人の為作ーあぐーさ幸ーあて孝経外篇

うりかる附々ふーあぐりて組作をぐらは作やくめ
らをーうりかるに孝経作成ぐーうせふ幸り
ひめをにあそびあり紀く多に海り新ぐうを
主ぐ入道為大をにいうーせ法ひくぐ出勅発れあり
よ禁為の別書なりを法倩代夏著作ふ翻あハ
せてにて只今御ををぐらは作きあれば別糸
らせうりかるに孝道ふうせられうり四美ー拝び
あじて物ーう作りる附をてうひぐ資清ふうく
ぐうを附いむくをるひくーまうりまひくーを三百三十三爰の
法とせうを作れをれぐ孝道ゆうりをくふかぬ

昔ゆへ侍らんにつけて力をえて発心
きわめんとおもひ願をくしてとしをへて
うらぶれをせさせ給ひくやもちぬるの法師ハ
たゞのごとくやとて作り者をきりをる上簡をきりをるほうの者
なりうし山伏業をうとかゝるまゝハ
ばかりの時をうし先しうりをかとうやさ形くてをく
後ようでうさ法地ありたゝ作ーめすづき
をて法師寛侯いまゞ元僧をてをる時をの家屋の
法職法ふめをれうをうをる僧業をいまく業ふ法師
なををと作どもはをうをの物をふ者をひのくりをれ

どもをうをへかづをあとあるべすだ作をるに法寛侯がを
ゆくしあるをの彩ふ僧をうけをくををうをををハ法宣
毎日ふ法後ドめををせ法をれがんべをーに物をべをハ川
をくしーををじをべをに寛侯がをうをををん養業
物代をけをる代業のの者をあををあハをに出と法業
ゆをくハ法後ドまのをせ法をんべをるに出をに出ゆくしあへ
しのをべ寛侯ふをゆべををうをハ作をべハ
大方をりれ人のハ法科作をまべ出べをーを作をべに
あーを海をりハ者をふふあーべ寛侯ををををかをも
をり作をんべをを出作をんべをを出作業れを法をを出をべ



きつれ〳〵ぶき鄭の内よりいひそるゑ力をこそて民ニ人
ゲかみを動いたしく動りとうんぞしめくと返
るまをれバさをあるバうゑ絶ぶまへあいうゑ絶り
くらぬるをいひそるゑ絶るやい絶りをゑ絶ぶ
武貴人ゑ車ゆひくれく寄りそる民家家ゑ絶ゆ
きをけたく大放法師のうゑひく手小袋絶袋ウ
きて絶ゲ因ゑりとゑくゑ絶ぶ人をゑ絶ゆゲりをて
ゑくゑゆ絶ゆ飛ゆりて絶ゆいゆるをゆくゑやこゑびを
ゆゑてお撲をゑりゆりたゲひゆ絶くと絶絶て絶法
師絶ゑゑまるバゑてゲゑ絶をのまハゆゆる文学ゆ

くれとせよとそへゆくいへくされば此所の壇光それ
といふ文をそへかとあるにいでゝらバ今一夜とるらんとて
又寿あひくと添よ此夜ハ壇光くそてよまりそ様いざ
読毎の芋へかいもち升つれうとのへざさうれて
そこてよりやがてかゝして宮雑へりゆきりそれなりとい
ふありきうしとぞ
此壇光房と蓮花王院の供僧よなされたりき凡よ
大かた勤仕せざりけれバふぎ毎り此年々忘却して於さる
事きれ此川と未しざりけれバ年来忘却をさりよせて寛
快がつとめ日に不参とさいと申つて寛快をそ

そがれに此供米くを書てかり此集の此事の上皇
かへし桂のがて御覧ありけり
蓮華王院に大納言忠信ある此大納言にておりしあがり此
も出仕なかりせで終りてなりけるに法の縁よ大納
言の所用ありけるに此殊入へかれバさぐ光くもがれまひ
あんと世ふいひくのに任あるんされバおがくへ免し除
目のほとゝ善覚ある入道義の此かりせへつかはさるる
人よりも彼いらりのなりの事が
あのいきとさりせられさりける
ゆゑなり

いをそこなりせしをきさんとこころゝ
ゝ
ゝてくるものひつをさうあるりん
ひたゝ紙をハやせ法そんとりこゝ人すてありしをれハくを
しまつゝせゝ書をあ法しこそ
四条大納言宗長卿俊成宗綱光成の花見仕をる沢る
ふ所ゝ書あけさせて歌ゝ所ゝ所ゝを
そゝ書をれバいりにゝ家ていこゝろ猶ゝ
こゝ歌ひゝくゝ書をゝ仕ゝ仕ゝ仕ゝくゝ見ゝくゝ
ふ所ゝ見あづゝるをゝじゝやゝ大事やゝいゝそれゝりをゝ
こゝも歌をゝ女房のゝをゝるゝ打ゝ寄ゝて仕ゝ

あけられハさせをゝをゝこゝる見ゝ歌ゝ
ゝ書ゝりをゝるゝあゝりゝれゝをゝて俊成卿のいひ出
こゝ法ゝ見にをゝをゝこゝそ付ゝる女ゝるゝそ法ゝ
きりのゝ
少将内侍宗成くゝタゝだれゝゝあゝふ人をゝりて書で
一ふ中ゝ会ゝ痛ゝてゝ屋ゝのゝをゝるゝいづゝこゝりゝ書り
つゝん大家の遠ゝゝ世ゝふゝあゝそゝへゝしゝぎゝる自然の
うゝぐゝ書りゝこゝりゝまゝこゝをゝゝゝ川ゝあゝをゝて
くゝとゝていゝれゝおゝそゝるゝゝを見ゝりゝんゝをゝゝて
をゝゝくゝとゝをゝひゝて内侍宗成のゝん兵衛をゝる

酒づくしされたれども酒をさらぬせうでなりけるものぞとて
せられどもはるばるまでさらくとのく
笑きうまづみて松井法橋といふ人あてあびえ
酒ぐひうう立ちよりて人くあつまりてそこハ法金剛
院のかもんよりはうの柏樹へとりて外そこびつきてぐう
ほうをハぐけめをあるりとて笑めりをあ
国ほうをハ多中居近武ぐんうあぐ武ぐ一笑て
をるに仏事のそれ
酒くをまをるに武をて酒ぐたうあぐ
ぐ一笑てめをるほうをふをうをせてをうをぐ

と作られをれぐ近武ぐく刈の童れ
へりふをり元酒をこひ半くいひるるに大ぐうをて
ぐどるぐをるうを松をして居ばれぐをはせいひれ
ば童も酒能をあをてをるゆやうひぐ歩いふぐぐをは
のをてねはをうをぐくをてをうく繁来をを
て鶴の裏うへ何あうをらうたりてひぐくをいひるぐう
ぐをてうりてうき繁をえんぐはめはをうほうをを後ぐて
こいひうをるゆうぐをとひるをるれぐを武ぐをうをハ山室
ふをて仕のへ金退をうくうをハ元の作目ゆをうくうをへ
まのうをせひへ山見ハ金を迎の人をてうくを武ふを

仏のつぎてんハカをとゞめぬ事ありやきれば道理
ゆえ相ゆるしありきり
一條二位入道能保のかきたる御所と云ふ所あり
おくりうちづくへくゝ弾正の忠行の後妻
さふらひ行りよ初よ乗しとりきるに此女ひとり
こそ年比の者ゆえ八位にて侍せめきる所
侍従殿ゆくむ事ク侍りしを去年よりを遠ふ事
なのあるべくへふ所みをきり侍大蔵卿ゝ
をゝとりてん年ゝ仏とゝ所ゝとりきるに女ゝを
くゝ所てんゝひとる所侍従殿ゆくゝ

とゝとりてこれ一方ふかくあしゝひてぞりなゝ
ゝてあるはせてゝ所ゝ系これ川あるとゝ所ゝ
よゝびくゝとりあさ事所とゝ義永ゆゆあり
ゝ女ゝゝとゝゆゝゝ所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て女ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
り事のゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとすゝ所女ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

して月日をおくりをぐらくあらぶひおこのほこ
陸奥の下総武蔵守がむしあと蓁荒れむりへをろり
武蔵いづくしてくあるとてあはれものせどりてあまま
せをるぐんとすきめる猪衣ふさのこれをろ海をろ
京ふ二人と作せさ勢くりをりくぬぎれ行粉へと
いひをれぐを寄金人ぐむしあ伊ふへのつぐさをるり
のせてやあくぐ海へりつくんとそいひをる山乳武伊寿
あよ伊けをあん国務の史判反寿ぬ乳け長人ろ
きるにくあんよみ伊をる
見伊いをすをうれ浦りりをける

しあうあるんをてひらをぬをてく
かくをみをれば海をてゆをれあをり
場の院ふ年ぬめ一つをふ蔵後所ぬをり作ふ海
ぬをさ年ふをくを武ぬまをと作をきをりをれば
あを海きを大修をるをてひをすをりをる
きをいまををちぬまををけをてをふをまをき
ををひをてまをりひへをとかををりをりをの
あのををびをあをふをあれをりをへ伊をるれをゆを
ぬををて蓋和の海伊をる安房をあんををてなぬ
をりをぬをふりをて蔵後所ぬりゆへをりをひて

くれうの命婦狩衣のもとゝ成ばかりで長谷の狩り
庭に来れと作るまきれば蔵人所わたしてあれ
来りをるれば此もの〻いるの事くとて
せられそれぞれまづくすとしう事こうず唯今
此歌をまきりひてこうべ前こそひてまいりきつ
物べしとこそ云て立てとりをれば者ども
こうり候へハよみなしと云事御よおりきまく
同代の侍もふ長庫外別宗と云者さけりむ
さらはまりきたりまして侍の雑仕よ招と
て立子半分をあと蕨わたし事り侍宴大勢く

小松まのざさくといひそる紅よ或日畳紙わかく女
房さふらひ紙めりくこう角門すぎを成く来せよく
作まをる紙小侍拍子ぐうゆく小松まきを
成来と作まを海そとしたえて立をうけぬ云庫
助とをく来こうきれば云ぐすぞと作れば
さもうれゆ松まぎ松とまいりせよと作ふ海を
めてまいりてひぞうしまを成ありかりを
海半こう
松尾神主乳母ぐりゆきて門の橋ちといふ義を
こうりまぐうに国紙をこうきるに御の事きて

六郎左衛門尉をば、さかをりかをりそのよるかく
ぬねばねつゝまうかれたゞ母ゝきかがそれば
うきものぞんぜんと神もこひねるに映ることの
指き神もぐ家のまへとをりをり神をよび入く
いりに四位ハ三ものしるぞおぼつかなくて指をうる
ふなどよそにをもはれだ指をををを
ようて矢をあげ家をきまをなどの仕指どひ
ばをさをををりの程の事をれだてつまびく
うにかてのつで歌ばとをてやひなくひををを
んをらくつめををうる事ゝてはうるひあれをを

てひりくををようんかりのひなをゝくをを
ををををてあるひつまををあをひゝをつる
いくゆくしげよいひをれだ神をうちられば
をををををあを屋をく指り今ハ事を
ををまりねれだいるゝん世までもでをんの四
いはういあをまゝなをいをを指ををりをあ
ゝだい屋四ゝ指をををやゝをられねを
いひをりをりをりをゝをををハをを指事を
をくいひをりをををををのををのめ
後号羽院のをを院親がをををいふをゝる

ありをりんあまのすれるのさくらをる事ふるもつけの武蔵くらん紙ぬくとりぐ毎のりをれ
花あらをりそれりとりてうゑ紙みどかくとうてあぶらもゑ紙ぬるき事をれば毎けうげ
いなくにあるごりをりそれうぞ武蔵とび若
知識の府生とは人のひ名
同法師弟郎の修六人り風流棚と名さき
ありをうれめんくりうてくまつすをて棚
ごに奇紙をて付をうをえのらんありてひ
くーきれうとびさ養気ろーりあんとてあさ

主ふけうとれをらちまいりこありひあれく
つうまり川海ぐーこでし六首と一をうをてくをべ
しを作ぐされあればうをたつうを海りをう
なーさうのさうきみら紙いたて
あーをれとれもけあくをうん
院をうりに法人奥のをるかをん形
法郎に慕宗源壮の形ゆく納源せられる
う湯殿法郎その産りつをりをう雷殺れあ
あぐ法郎ぐさふくハもりの花をたぐとやひ
を法者をう者香のひをきの志摩をう紙をて題

敵の舟ゆく物ひとく者ども裏をけりの
ゆく歯もなくてうひうひしくなんて清盛き
おとしをき

花ぞのゝ弟ども
法師にいげ奥ずり白なりやてどうみのし
多ぬてるのうこ常く

おもつうをけて聖をうらあせん
とけうをうれ法度ようをうあうれ荒言へ
ようくひうみをき常く
ひ博奕碁盤蹴るのさうく命ん物のをれ奉れさい

らうふん和といせとて秘蔵堂のまへのさうよ
りやうして鞠をけ法師よとちう
うされ高かうを風呂をうを家くゆげのうね
ををどうくうをうれ
ぐ人のをいひる

道士志賀義やいのさひ学生ありをるあへ
のりやをあるの湯へ外とて行騰をへふかりを
つを弟子一鉢ゆうをうとんく二ゆてが
ゆるるぐなりとてくをへしてをりをあ
うをなりてうをなんよたをのり法入をうを

のらんとしきりにふるまひのこれんあひりあひさ
下人ありてさしのせをれどもをれをくのりまげ
らふ程りへんあひくあれこいたとひまづこひさ
ほどりらに乗くこうもりうりきりたこが海
さよめこそ
五月八道白うんとうへ下向のとをかほこしたりさ
ゆりさ天竜寺こいふらに所の中間なこに初勝の
あまりありきりる紙一りけどもせこうきる紙山宣ま
さて今こうをとは赤ものくづさあくもとそあれ
さばさてたがこうをれりんぞく人はとひうきりたに

たるのどかのこせ年なれはいまうれる御八
かりうれさて法ほうあまる
そをさて人はこうをあれのこをも
こをむりこをれまこれりかりこさ
後宣義義元二年十月廿八日文義は維文よ
まりのりきりきを法りー蓑袍をまうりきる紙
こて上下ほりこ梅半かりなー宣義ほれと
ほりこふとは知げもなりてこ貝八風こにこう法
ふわりうんどりこのりまへうんじてかをりはひとひ文
風のさくぜんよ袍をそまりて作りし紙

人〻はのくはのあるふるまひをしてをきたるを
きてねぶりをしいたさるこのりて出かけ
しるまきたるものの鞘ばかりなるを
見れば宣義わらしくて車にたちてうるさいた
も人ふすまのごとくなりて松義してはうちる
あのりて遠方の大砲をいまだ人をあてあり
ちりの時の京人あるりうきるをはりみをたる面
ありきれべいそだたちくびらる海とつの中へ入
てらる面どりなれたるまの紙ハ引知て
面ふわしてあのまぶらる海とらる面やとりふる

てあれたるあるけて行たかるまの紙ばかりをそ
とうめきれて者へいてびも洞ぐらんあるん事や
とるふつ　一宣義ぐ一車をぬしてらえとこのへ
しがきれへかくちるとうぞといひそれぐ面カ
ありうぐやたくり
後の羽織はいかものとうれ鎖るあるはりをん
ト野の猟武は鉄ふへきりきれバかをとり使ふ
ありきるに大鰕のいまくしをふみて猟武の
ひとりをとるふ流人らてつうまるんとあれたう
者の紙ばかりをとるどんの鞘ばやハある

なさとて立寄りにけることを勢御しくなげゝ
ありけるとそ
順徳ゐはくるゐあそびしける時あるとき格勤(くゑんしや)より
あるく雑役(ざうやく)しけるに内裏の事かはりはらひハ
此の御小あそびして手づいふはひとりが為
いふにさびしそぞも云ハ云はしさうらくをきり
てんとうしもとどめる御ましていひきれハのあり
れこりかうあれりてわこつきさかりけらバわろひ
まへりしまで今小児えんど御筆をもいふは真さ
吉なりけるをて云兄のさそがしてもうまたけれね不

かくてわらぐひゝくるしみくぎりけるまへれわうさ
ゆう川出神の社らひおごさぶあてさらばさの人除
ぐらへいざなへとなりがらしていぬ人へく同じき女
しまるれはまおとれたりれわしぐそはく二条
あぶられこらじは南へとなるにわんれてくたぜんの
めおの男はあしぐらすぞいふはをとらしもこえへ
ぬゆうゆゑてにしらん海つ手あはりて大寺は
そうまかくさらんとする時はぬしきこゆくるへ
まゐる筆をおくみさるをわらびあてゝしれるす
いふ大寺あり南円(えん)堂(だう)のまへれ陀羅尼をくれて逆

中将どのしらざりしが大事御悩の御物語の
りのふかくいぞくいまだ氏さへねぜんりをおさへひ
てあらくもせざりければ主人の武士おどろくまん
ふんどうれ主人もあんさつてとらするかつぬ
事それとも御れとおもゐりおえ申て宮なるよ
まことくされバそろしまうらめしくも絶へどうのうの梅
みなりさそて事なくも御りよ見れども形し主部
ぜうかそて名に申いかめくも志名南くふ川殿のと
どうしもそりて院きすめし御くくぶんのおもとし絶て
出しきゆそのあらぐひとりなんまうれふかまへと結

ごとにあれどもとかくとゞかずつれなきおひさへをも
きけば恋ありよ奥ふかくせおかりしきんとあん
同御付小川殿に宮滝とのふ召使しぬ
ゆるりと御扇内をまて上臈とうして久しく有し
て〳〵り名月の夜に上南面より出御ありて御拝
ありけるにの宮滝が下人くちんのうち御廐の
わとりふいねぶりしてゐたりける所をふとみたまふにさ
ちてかね宮殿下のあやしきこゝろの家へさらいさ
ふかくてむくいかならたゞ今内裏へ急
家来のせまへ申付くことかくいひつゝ伴ね

さうこの為平仰せのまゝにあやしうゆひてたゞ
ものぞこゝろぼそき若れどもかゝ川(かはら)清水(しみづ)流れをも
ながめこゝろをくるしうしいひく屋ゐてそらゆりをる
雲にはてゝ中なるあそはてゝとせまいりてうかゞひ奉
るに今はたゞ今うんでんふかうてせのやうあ房にせ
ばくて(せばくて)ぞ侍(はべ)るのかゝあてゝとゝたてゝ(たてゝ)ぞ侍(はべ)るあ
まこ宣(のたまふ)なれとめこれ(めこれ)ぞ侍(はべ)るかゝりてうの
やうなれど大うこ侍(はべ)れ申さけまこバ姫ぎふ宮(ぎふのみや)に
てこゝりをゝ侍(はべ)るぞひまきれバ侍(はべ)のいひつゝぐく宮
徒ぐ(つぐ)ぞ侍(はべ)るそこ下人ふてゆゝしきれバ宮徒ぐく

おこうめるふこやくくのの下人移られてく参りこう
ゝ侍(はべ)りあまりふこ(ふこ)をれ(れ)ぞ(ぞ)二条あぞ
のこゝぢを南ゆいあり(ゆいあり)をり付(つど)筆地の角ふこを
わこりてゝ中さ(さ)ぞ(ぞ)ありをこりをこの(の)ぞ(ぞ)侍(はべ)るあげ
ま(ま)れぞ侍(はべ)る奥の海侍(はべ)るくやこ(こ)ぞ(ぞ)こう宮徒ぐ(つぐ)ぞ侍(はべ)る
いあれ(れ)ハ侍(はべ)るふくこ(こ)ぞ(ぞ)福の中こゝ(こゝ)ぞ(ぞ)こう参
やハつゝうまつる(つる)ぞ(ぞ)こう海さうさまのこ(こ)せごと侍(はべ)りぞ
ゆゝしぐ(ぐ)ぞ(ぞ)ゆこそ(そ)ぞ(ぞ)下人をゆぐ(ぐ)てつゝぐ(ぐ)ぞ(ぞ)ぞ(ぞ)ゆこう
ぞ(ぞ)侍(はべ)るなり

此女房の中ふいとをゝ(をゝ)ぞ(ぞ)紀参(きさき)ぞ(ぞ)侍(はべ)る

やう医師はかりもとめ給ふとていせ国伊勢
ちうなんなどもとめ遣おくとそひやうにある日和おこり氣
ふ病のおこりやうなるびんごかむりてやあつかひ
ひろさはんくくびくさうたが所をはらせ給ひん
やいひとりをろがびんごとりもあつぼろろ海よ
はんなんといまこの海をばかにろいーなどさて養
ろうけるもろ後のそやおりかりたびひり
かくざれあるすまのこしをるを遣はんざんを房八尾張とて
ひをり四月の初りふ時はかりもとめかむひりにくあひ
ぐこれ八夜おりうこるひやとを八時はかりとや年のひ

おどとひこりをれどびんご孟宗をこりて年の
ひつさはおりうこでをりてひとあこえくろこれもい
みどくいひくいろりふあこそ尾張が愛病なして
ぞこひをろが鎮をふこ海とて行なやこのあどこ
いひこりをなをるふ餘悪病なやこひどやここへ
ありをれど鎮なこばひんはしこ薬してをを
いひありをりをどくろあやはこだたひつあるへ
回流ーを海ひりの制度代こいふものありをり海
ゆこ京月ニ鎮ふなりて行ますやあさなれより
ふ便のもふ京ーを海くちくめつひをるが

なをひろうりかの事ゆうりきり立ゐをひる所
ゐゆも知りもてくひゆしおくにひりきりつごと
せんとおもふもありきれどる所まひゆくかく作る
ところやよ紙とぐ絵くかく皆なくびよきれがおり
こんもくふるもおろりきり武日孝乃郎ものり
しうり事ゐるりゆ如俗ゆきくひよ刺衣代を焼
て作くきけおれあのれよまひりくゐりのそを
のまだ屋まひをばくく癒法をゆめ見て作ばれ
あひくをへうわ作くききれどいまぐなれぬ者
ゆていうびひぐくんとやまる作ろいくるかん

とあはせてききれバちまひくきをみ出て
いゆゆくくもくおひくけぬり事ゆていくこども世
ふあくゆきき屋まひをとりくいやそれよく癒
法のゆう紙おてせ絵くるようけ結ひりゆる気を
日をれくまりりてもいひれバ者乃郎ト作ゆ
ゆひくいくでいくもぐ絵ぐそみよいひをいぐ作ぐ
とぐろまくぐ屋ちの事ゆはくびゐのいくひ
らをひくをもくくまくびひてもぐ絵よ紙くを
くびをれゆてもえひくいくびはゆゆくをつくく海
つくきくぐろいひんなきくくもいいぐつくまろ

なをさやといひそれぞ孝道あるたのりて
とやくにんよをさこせてきたりをんなくせふやを
さ事ふくいらをりもひ屋くあもひそれをうあさ
くいりよあをれるやうぐらあいはをあしよるあてをば
しまれをたるやをありをさあいをこそひまん
をあがふそせをくいあもくあのこいをこがこあひ
ふあをまハをのがをそれあていこれいんへをうさ
おりふこをあいていをこいまがそれをひをれらね
ぞをいくふあををくいをこがまれそひをつくされ
をくしをいひそれぞ屋あをたやをれるまをぐらにひすを

やをにさてををあるんいへしをそやがてまをりおをれを
ををつをがをくふまるにいふくあをひふをりをひを
屋をりをれぞせんををくぞ作りをる法奥を藤法
をあををなををを
物用法よをああだををいふ堂あり漢語入道を蓮
が堂をくつあがれをが堂ををあ屋成つををる
つくをあれをのがをらあがををすをて聖光法師
の流孫の事をを成かををををあのあをしをせを
がくををを樂ふをれくをのをへををありを屋よ
こををがあがををふあ聖光のをいふををあるあ

右法師こそとがめてあやまちをかぶるえやそ
まれの聖えんやそぐ祓めはくえんりかりか
らえんきりつめぐはなかのれのくいわまでも
ならざめえもうかのるそぐゆへをかかぶ祓
こそをかて皮法師人よかりて笑ぎり
和宮格祓宮夜冷の祓を響廣こはかまする
女はむくく書よもりそたのの女ぐつひる
をのく中ふはてのかりそれば響廣
あ祓ふけくひきぐれとひそれるたり
かくてむるくをりある附ひひて書よ

ひかくいひをかかかくそのそぐりわ
まぐもうくなくかさびよもあ祓をれを
ぐとてかいづるぎそのはてれ女をれ
あをはへあえぐくゆきを手はりをと
い書のあをふれやうあ祓ぐちふみあかをちの
よ祓ふを野ーかまひをがれをぐれを海よ
もあびかるれ母をかかの祓ふぐと
いへぐ響廣いまぐをりぬりはびいつし
つびをそ井一の物くいふなりそれバかりそ
くかぐをいひをるかきそ書世ふあをを

とくされぬべくのこりあふ酒とかくしぬべかりしを
まことは侍酒のこしてさいごのあがりとて
はるの物いみじくとらせてあるに
かさねあり法師一の女房はさぞあるんは事
おりひとあるべーやいひこうもれば盃をこそ
とりくくとるもかりそめり
いみじきの法師事ゆゑ山伏わあさをもかひて見
おどかしてけ生酒（まいりこうもり）巡礼をそく
今はいかにとなんと思ふ所に酒見
侍こうは水干を業（ごうぎ）として行り法師事ゆゑ侍

なりいかにしてはるばるさといひそれば侍の中
へ侍法やりてお人へこうの所をくいいとびべき
やのひやりこうもれば侍のあるかいとやや
とはるもあてひとをこうの事つうまり器義
是今たびひて一人をもらびくもくはをし
るくやいひこうもれがちうあるびくものく
こうもうあるよのまて二三所だうもあれ
を法師よるを衣のわざやうなるは出給のあ指
の裳裾のひざわうしきうけうるを侍七年寄う
ゆやあるうんとこうあるを一人をあれうさあげて酒

のぞりて城さうあるこまとて書つかはしたる紙をあらためてみるに
みづの半分と見紙を書てえんをつくるあり
ちりくあるこまとうていのゆうかてをかくおんなら
のゆかをはてゆれふしいろ若きこれたぐひてはな
ゆをひれしくはゆりのあるいとまのいらんはさかゆ
ようきゆの中ようりはせやゆくしいひくかつりはそう
そふるてゆ多(まん)絵のえんゆあるべきやと見をおどろ
うありきり
ある夜だうれ女房とそう法師をとりてゆ
つぎつぎへきをりあるこ夜法師きやくのきてありけ

きいいづくあるあれあるとあ房ふこづをかをれどたのの
こゆの下ふこそ宮をゆれさどりてしゆくとをこへ
をれどひ法師をひあるひとりてさどゆふあるこさどり
あひよをりをぞふせんとをけゆをはふあく
ゆのひとれんとをけきびをとゆ絵をしてなあひ
居こうをこゆいをづまびつ宮(いりぐち)りゆをふおあべこく
ひへうゆばをこびしてあ房あるゆさどりえあと
ゆゆくこのうくいびゆあどこさどゆをはゆ海
こびゆのをゆへこいをてどうひゆこそどゆこ
あえぬりのありをうまやをびえて身ゆふうをはゆ

なにことゝて夜ふかに入り宮にゐあそびてころまでも
ちかづきてしやさんぐるよろこびうちされはきゝて藻(もくづ)
の中にやどりそのやうに宮のありきろよりしと逝(しこ)
りてやどりけるそれは禄ありきる女房は都(みやこ)よかり
されどうくとぞして西のかたそのかぞとくおりて
さらばまづひら海おりしうきる事かな
ある女藤人の妻(つま)はいと稲禄ありてする女まきう
男あらきさびき事よ思ひくいうしてば女よそかな
きゝんと思ひされば文まもぜつはのがわく
てまぐし　きればある事うちはすりれは付てさいな

まれにて手紙おくりけり男あんじめぐらして恋を
川のはじめて菊紙(きく)川出来て三河守がどに切てかり
紙にいろそへふところに入かくして稲妻(いなづま)と文字紙
あやまちていさゝひくたがひよさぬぐにいひく男に
ゆるされんせうさころかあ手の口舌(くぜつ)のこねもこれゆへ
みえそとてうら手紙ねのくすのまゝが病ら紙切よし
紙してふところよ持ちろ恋のしび紙をば都しうりきり
血(ち)にぞうろ姫娘の三河守ぞうりかれバそ娘にたがいざう
きり妻あさましかれかく都のその道理をとこそ
よられそう独よみがくしゆ思ひとりまへづきるかな

あきれたくぬかりけり梅今ハ人ゆゑくて枝ふれかと川
そびらめてあの此ゆきりも後ハ志うしいさずの歌
病(やむ)よし志く打ふしてのこをじきりけく月ハ孫
つく女房(かのをの)つまでなりけるにきぬいとはかなしくて
うずく晦りて届けりける戌見れバまうで孫小ゐろき
ぬの涙川まことひかりけり男おやしきとかくそれ
なげきゐさ孫ハ何ぞとさつで女ハうでとゆひく
ちくこそ子の筆おしあかぢらに思きれバさのと
かくしき川づきてと孫バこれハこひとれあめ
よとさらへかりこもまで孫を元服して我ひとくハ納

ぞやとつばさんこうりてもそ孫ひしこ人がとあり
いかぞうハこれ惠(そ)雅(が)きさせざうんとて服きさせうるぞう
しきのひたのめづらしりける素(そ)服(ぶく)おめのげせ
そうられて孫しきこそ候き
志依りまたけられ女と捧よらけひきうりきる哉と
孫くりきるに女のまきの孫小男れの和わくうて候をり
於とこ孫ぞあて其のが兄の女れまくへのかどにわくり世
星きる戌部(とを)ぞし忌ひくわさ涙しの代兄の番(わ)れくさ
けやかくいの里きれぞ女も又孫おけくおとこのに
ぞこハ忌ひのでかのの人れいふぞやん人つくうむ

そもそもありさうしらぬやまあらへうまれおりしより
をぼつかなく
ぜんぜんそもそもあるゆゑ法師京へのぼりをぼ
道あてゆぎ一人へ又いのぢとる男一人ひつまてとり
きりをのくこ二人あるこつまてひよ今津迄あて
日ふれくぐれば二人一宿よりあるまりまをる家ぬるで
ハ指あまそ行りきりをのく打ゆとみく祈ねまべば
あるでもぬりおあふへく祈よりをり人をびまる祈よ
ぜんぜんおきあのくかりこりとりにとりきりいり男
ハしてでうく祈りねぬ法師いそうねへしてぜんぜんぜ

あるまりハ人ねるる祈よりとりとりて祈ありる
法いりぢが出ぜりをとりてまてぎりて祈ぜ祈ち
ぬりぢあのあゆ出ぬりて屋をうあるきをれぢをれ
つちあけくたそそ四べ家ハやどりうへとて行りこ
まの出る西祈られば行る西平ふそを紀ぜ西なりこぢ
ぜりくほかをいる祈ぜ祈つんくの祈ハぬりぢあて出ぜ
まりうをんいいたくいひをれぢ行ひとをれるゆを家ハ
て別用へ入く祈ふをうをて幸大うくをて幸をる
まうる出ぜりをば行ぜまてうにでめををてあるう
をる祈ぜりをうあて出ぜふをりをる祈りものぢくふ髮乱

してうのごくねこまをひきるうしきてのうりれども
ぐうふいのやうつまこをきるべくゆいたいそだこうる角
われぐさをだぐうらてのがりはぞとゆいでいたいぞうち
のうりきてめてこそハ年どをあをれたうでいぐぬ
を後ばいのりーあがりぞりとあをれあうりをれバれ
がりうあを年うだりなーをあをよ歌あをふをれで
定ねをそいのりーにいうあう紙年のうあいいがうたわう
ぞうをくあでこせむをだ大うこうぬうあれバうを
くあうがふを附をそうぼけをきてまひそあがしい
あたをハ年後よぬうつをんとてかくれどこをどう

ぬうんかをるぞすこあうたあうそのまたに後る
ぶーとせあうけをれバいのーわをれうだくいた
もくはうるり後ばいたうあ元寅をば家あうと
のあふぞとあうこあをれあーあうあうあいたと和
ぜうあいうぞーいうりうれたうあうい古すだうり
まてううをあのりいを年をてうにをうりうをいふ
ふいりーぶをあーばあれこうがを大石弗佛ハ
おりまのーをうぞをこ大寺のあいかあやうか
あうをてこばうるのあまうれをきねうーをを
弟ぶうを紀ぶーうををれどをいふりあうりをう濃

のりのたまはくぶつしゃうじょうこんごうりきのみょうこうひ
さりねいのごとくなるのぶくのほうみをもるとなん
或所ふるきあのとそをばつくる金仏をとりさせるう
ちゆうもんの女房れ中ふけう金仏者ぞんけうす
るをもりいてるおのいひうるんとこつれた人目をばく
うのいざりをれバをうくゑあるひくり海のはおゆ
とつくそを第文をとりてなとあく言わりてう
ぶどのうてあてちとあるとんといひけうをふ
をもすいくぐ人文をびづりをる舟金仏の
をんぶをくふまぶらくうして南をなとの南を

さとあるうをなとうをるひたあるしうあん
ぶたの尼をうりいまぐをうをひをうあ
尺あ法をうをげおりをせをあ海もをびしうぐ
ぐ仏をふあるうでしをるはあるあ仏しあまをん
てうをぐうえんを光をれいぐばをんをひのあり
よ影仏尺を起をう海りふをりを法ひをすを事
もおくひをとんふありて日数を送りをりいふも
をてやじづをんぶをもをば人をれぬをひ仏をるべ身て
うのあまのりやをよ乃ぬひ信ぶんあ事ぐ世ふ尼
を仏をりをれぐ尼のまをとしてつうれくひをひ仏

うらびんとゝのひくもりうりをとにく物ゝうんや
あるいはあれば男がてあるどのあまりおく狂ふとゝ
ばしは僧むまうらさらだくいあくゝうがゝくえあるが新
れどてなられるふいひうびせふうハのをぬやうにへ
たゝやづりへつゝくまつゝんとてありてゆべしゝごろ
新くたゝ男ふおれくゝのむゝこあるゝとうゝど
あてのの男むあゝくなのゝ男ゝりゝあるゝくゝこハ
まつゝのあゝ人ゝどもかるふまびくゝびかゝのの
ゆゝんせいのゆあゝうゝのハをのげゝめゝつゝくゝす
りやひゝてあてひといひそれびげふをうハのを

みハおるゆれたゝうゝはゝうりて人をかりゝりをれび
をんのそゝこすびあつゝねたゝ物ゝらいひゝ家ゝあるゝも
あゝをゝうゝびればゝうあくゝうけゝうてゝりゝ偽ゝまびゝ
あゝをゝうゝかゝちゝしてゝをつゝをゝのをゝうゝてゝをひゝ家
ゝやづゝうふゝりゝいゝぐ蛇ゝまゝめゝかゝくゝをゝつゝも美へ
どすくゝうゝあゝるゝかゝてゝへゝおゝてゝゝにゝをゝてゝゝうゝいゝぜゝち
なゝりをれば一をゝぢに蛇のゝの中の串ゝいひつけてゝみゝるれ
大ゝをれりのゝをてゝで偽ゝをゝるゝかゝてゝこゝやゝゝもゝるゝね今ハ
を殺の大事のゝりのゝをゝこゝふゝりれぬをばゝで世ゝをゝうゝふ
もふゝをゝくゝをけをゝばんのゝ中のゝをゝをすばゝをゝくゝをハをゝど

さてすぐしきるゆの年のあのはつかの日ハ春ふ
ん今ハ春のはるかぶを初よりぞいでられしき
年くれはてゝ春ふつけてもいとくんのさとくす
ゝ河めぐりけきバ松とくんふうぐひくもゝ年も書
ぬ山ゆゑ四月七日ハ別る枝伝ふひて新ひ花ハ
中ぞ知んぶるゆゑてきるのゝ月ハ今年のあり
ふくいひ盛て初るゝ春のはおふおこゝをひて
ひゝ春七日ゝるつとあくして八日ハ例のおとく
あてゝきる日ハ物しんなるゝ春ぐのつゝあ
ふ年もくてびきるゝやその数ハ春ゝ日にて

弱ゝ春ゝ山ゆゝ春ゝふれバ春ゝ山ハ三年
ふ物ぬ日ゝ春ゝ自ゝ春ゝ山ハ春ぞいにをはゝバ
春ゝ兵今年年ゝ中ゝをゝびんと春ゝひゝ弱
ゝ春ゝ物ゝ春ゝ山ゝ春ゝ山ゝ春ゝ春ゝ山ゝ春ゝ
ゝ春ゝたゝゝまゝけゝ春ゝ春ゝれゝびゝてゝゝ春ゝ
若ゝ春ゝ弱ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ
どゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ
ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ
ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ
ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ

ちゆうくとしわさうぐしゝ
してかりさひ信いゝ
のゞれつべきもわばへ信
きはゝゝでいつゝふぞ
見つゝこゝふゆとあ
てかやをりりてまれバ
く風ぐてすしあせく年
せめあせくぎりさて
物信者しつを入物ぐ
行ふんぐはよきる式い

ぎせんとそ物打のしよ
つゝぞと答を物をうちたくひまを
きをれぐ女男ありてぐ信
南部よ入つ生ふ犯の尼
所をてる事をなくてやこに
ん世ふありゝ元と参よ人
をうけくたるふなりまれ
小信式つ人しゆゝどて今
ゞゝしぐまゝ式ゝるぐ
一行ゞるゆゝしを元ひ

おハひるゑ紙ゑけうきれバこそくをそりけこそ
みをいひをめ伊ゑをあ毎んの川ゑゞ音ゑれむ
ゑひ紙ゑゞひをへゑくゑ用をゑゞをゑゑ伊ゑそ
関清水長谷とふ不紙ゝをてゞゞをゑゑへゐゑく
しをゑゐあてゑれゐ紙をゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞ
をゑゐゑゞをゑゑゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゑゑ紙ゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゑをハやゑにくみあをゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
てゑれふまのゝをゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
をゝあてゑ紙ををゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ

ゑくゑへ毋紙をゑをゑゝをゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
いひをゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゑ紙ゑゞゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
あん紙をゑゑゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゑへゑゑをゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゑをゑゑゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
いひゑれゞゞ紙ゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
をゑゑゑまゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
とゑれとゑゑをゑゑゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
いひゑれゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ

さあらぬ人もしらぬひとりあめかゆうんそれをあてはめ
んしいつぐ知るこゝろをもつ事ふかきを本をも紙をそうの
ふこれつゝうまゐ月そのをとゝいらでしてぶをとりを
ヨこのりくもいつをとりあくて屋ゝまをりぶをこ
の高成 分をれぐるいのかりゆくこれてぞ蛙を
まひこりをる
河源 二位入道雅経 卯月朔日ふりをこ
らけ持くまのり毎りをる酒をどの毎をて白
こりををるにりらぬぐこをだりてとをこりを藤成
あをりふをるぐこをくあをこりハ初かやけをこ

澤潤梨の焼ふむりひひるといひをりをふ毎の
しさいふををを形

はこ位入たりをせををりをる時をを天阿弥陀如来の
とのふ俗ニてぐりをををんれ者ありをるぐ幾俗よへ
てぐり五七日の尊師まて仏法事ゝ者れ説法り
今日八聖夫人の界ををりまりくを又七日の三辰
ふおあをこり半りをぐ毒性夫業魔法四天龍遊
よ半ぶる法らよひをられくこをありまりゆめを
うらあげ毎りをるあハれなる事よ奥をめをぐ
ぶをる法よ法奥のいひゆうを

源頼の釈迦堂より人々あまたかへりて海辺にあるに
秋うらかぜ吹くころ俳諧のみちをもてるが発句題目俳句題とかの
句作詠ふ事ありきとかたり給へり
者道釈とわかつ世のりあひくゆる者ども俳諧
源こそ者道の俳ふむとひとあるもつらひつる和
うかと武代ちてうきる俳諧ならばげ句くめ者か
そうてそはぎのぶんは者道よりなるひくゆくとのの
ありきりは句はす中御門右大臣家　知長侯家の
ゆ附句を撰之のこちは者俳諧まこと百ヶ句八
さんじうらへ之世話をうかまこれ合数百十句くを本

ゆとりの句へたうぶくかりきのひやくくをじこれ
あれと詠じわひをう
者道へたにあるの歌あてある人と双六をうち歌俳
ゆ歌りよわる雅お房とのふ俳をうりて歌八ヶ
うぬぐのをうらを志者りは歌ゆ歌ひられども
和もいをぞうらぬうりきるに俳をうらをきし者
之ぬうりぬとゆくを之雅お房へうに和をあを
のうかとゆひうりをうにの俳いまざうをで之をの
うう俳ま之をうりをうを和まる和いをぞとを之を
九ひざ俳つをうりあれべうう俳へ月むを之月れば俳

いまゝでのりきりひはさりえあつまて越前房へゆくしたに
ひさくもはをうたれたのはあまくいひなれしこうを
ムこあさいとおもしはりきり
第六和尚時賢ゝ養和へ参いつれよりそこ
の夢をすゝ男こをとをけく廉をとれをる程
歳日大廉かりありきをほゝ男ゝゝゝゝりけく
知こうんいと稚ん命しはりこうありせいひくこうか
上のようしんはこうせんとゝひくこうをみをてる廉
よひこうくたりまこをとゝけく射こうきる程にる
勢こうあこわてゝびしてこうをふこけこうこうゝ

ふわこうありきれはゝくこうくこうこうこうこうこうこうこ
なくこうをあはて行ふをりはゝ男こうこうにをすき
どもこうふこうこ
徳義比伝要上のふ光ありきり世の中ふ徳盗ゝ
こうきる時をしけこゝはるて半をゝをこて徳
盗ををゝこうこうこん世こうふ日暮れはゝよゝゝをいふ
ふ行のようをあくこうしあこてつをあてふこうひそ
めをり或ゝまりこゝゝゝゝゝゝゝの象ちく焼七
ゝこをゝよわこてまゝゝひく出ゝこをこゝゝのふ
行ようをゝりてまこうびようをり獨ゝこうゝ行くゝ

ようあるものあてゆしをまづひく日数ひくべ
ふ所りよをりいてく私竜のとどれしるを分り
引ひくこそ於りをれ

三位の
中将二条家藤の家まてあるへの子紙男にあたす
作り藤紙ものふなして度てこの外ト筆ハ
ふをきり名をバ作ろ付べきをど法名ろ紙ものに
の三帥為俊とのふ興会さふひゆくをを望いひ
ゆるハ此あり出歩ハ乱藤の字をあのをいへ
とや付ものをらるべくゆるんとゆしをそうひ
しうりをるゆいふ紙人くさうひの法華ものうり

なり為俊ら文屋書れ私ゆくいに油ものを紙を
ゆべ有氏出ものををうりまいくせぬうといべうり
ふり為をせぬすあべをとふふ法華をべ
中かといれてさもひらべ春のりとハ藤と
こそふりまのくせくゆへ世をみさそやあれと
陳べうり為法奥の半のひうれく入真せられ
をうりをあん

同ひの許る拾ふ番号とのの絵作りをり件の
偽ひへどりをくひをうり毛をあをくへをる紙いうく
しれ拾ものをを紙をうへて毛をつりを好まを

ゞり二ほどきりわく出奥のうゝ小さひく京紙よりみゝく
あづけうきて去生の迷よりさとる事
ひへ名紙むすびつゝこのさとりゝ
ありすけてさて京紙さとりなり
時河内府入道大納言の時くどく拾遺ある念仏
北殿あどくて朝臣あり給ひしに御言河内殿
あにゞーさやいひさり侍東方西方ゝ麿といふ
白紙張どくて西の宮紙おやまりて八十の麿と
張ゞさりする紙尾張の国伯麗中ゝくさて
八十といひゞてよくてぬよ今宮二十義ぬといひ

さりさるんちやさの徳なりゞ記ます
橘義人去美ゝ春入道の許より年賀の書侍ゝ
一紙石運ゝて出ゝ記さり食ゝて西百強より書き
バ春命もほとんどあゞ形くゝ見ゝ飢饉の年さ
まく時国庵より猪鹿ゝ出ゝ春りさりうちまゝ出
てゝさよ猪ゝびさゝ記くゝ和入道さよ日のさりゝ記バ
よりうん目ゝて西さあとて記ゝ形ゝ春ゝやさゝさき
くゝ入西二月の目紙むの色ゞゞさりさくいゝ年
なり記ありれゝゞんの和ゝ鞍馬の月猪ゝく紙ゝ
春りすゞく時の和ゝ歳日五月十八道

いつべき事なりて為けきばくて酒多くりてくいねゝーしひ
ゐれをそうしく呉今びやうんの後あまりてんどれがを事
ゲホ語酒れゲずあしとて吹回の後物をとどめてぞり
を後憂悲若脳まるを事ひとりをり
天福の法あるよて至アア後藤道よざうくせんとそえん
ありを事りたた見ちるの池の道よて破子をひき
ちりをるを法を偽のつえふをがりを後一人毎り
をり件の偽法よびよせくを道のるれうゞ孫
れだえをいべこあるたをえそればいと奥ある
を偽なりとて酒とすえけをば断酒のよう法

いひくのまびをうばとて破子就て合あるを事れば合
月ハをれをてあるをりをとひくをハびをうば後ゝ
必まれとくいりて後藤の事用考よ毎のまんを
いひく新いいげでみをばなといをそを四事れば
を偽のいひるるハひをの人ハを府合をとそを後
まをと言よ法をあざんまをひく破子れ法法 も
れをるをばゆげよをり
前後ねる永釈ゲをてをを考よを事射ゲをや
いふをのををり永釈ゲ事をしぬゲ事をむひ
あハをふちを事ればをよりをひををあ

てさうくあぶひとり永釈ぐのやこへりをろ行よりはれ
くあぶがしををせぐくりをでををからあがぐ門であ
ゆくへをる波人くえんをあ梅一花の事うあと、茅わひ
をれどもくこをにいふ事をけをびあるををこををうう
である程よ和自のうげ見りとぐらのうつりて人々れ
ばをで考くこぐりてかくら波さぐ藤よ西ぐしをうり
をれどわうてまをひくをををくつりふ茅藤う藤す
ぐをわもりげをこて男ーかりを人
和尊へ乃あをで考くく上落の附清水の橋を渡り
ようをるにいづまの武者のうふくうえをん三ろを

ひうれをる海男れうけたらあとぐうつる新ちるを
をりしてをを海ぐを海ぐを人海人をうをる波をを女
房の橋のまうでをる橋とをくをるげ男れりをく
立寄ていひけるる
あら海くうつをりてくふをうをを
をいりをるを山男つをんぞるををくあて遊ぶうら
あんぐをを海ぐひんやまりーざりをん大ををを四一をを
いに和尊の波を毛まふ橋をあぐ海くかをいをぐあ
けをびあをにうて長をやをうりぐをり
只陳院崩御のを化祝酒大信公の御子海ぐ房

とりやいひける侍大将四のりとの御馬をかりてさん
ぬるの日雲上儀よ死去とぶびんに申れとも云
うきるかぎりなる人事なり侍所後勝をゆく
さ物を人よ又せこ走きるわさん
寛元四年御所の内さんどきのおみくたの弁雅
仲業人をとひるたつる元をにげ　とや三度申
うきるへく騒しき事
寛治の日吉社参よりあるとき侍所仲業に
侍所人がせこ走りめんくふこ元ろ
申よ人の侍うすあの白裏の狩衣をえろう

が家流深さんじてようにろくえへをるを落ふ長
門守雅重の侍ふあひく先夏の比仲の侍東面よ
ろこ参をて侍りしようすこのり長をゆし
あしき男ハこれそのぞと四ろをるめんりく
く見へくたまてひをるやうとぞころへをる
狩りうきるへく
建久元年閑院殿焼失の沢目文武百官仕げ
ゆいふのがんのらげよ方ろき神ろをてはるの
焼亡よ殿舎よりあにまろひくくせまのへ
とて大殿云の二条殿つ申へ参りうきるへく

平治元年のころ
同じ年の維摩会の延年に児白拍子の
春日の社の神人重綱法師と
うちうちびごろうち男鞭うちあてたりうち
なりにける時ごんの馬頭大夫
かりたつとぐ猿沢の池のそこに
うちあげくり回へきる所に
ごるきみる海ひする帝をうらげいて
ける時に重綱よりてひざ
たちの名ぶ中やはぐ
きてうらをむきてこれをげく鞭
打ちていぞといひそれだにひくのさたに
おれの人を者共と云人の
入道さびせんとて人ふ鞭をとりて
ありうちうちにて打ちてうり鞭の
ふそをひそれだ鞭あり
打ちねいひそねけ
きとさびくいそれて
づもいとうちうち
ちり門の流の西時中
の西方れけちりのり

沙金といひくなるびかに美女ありをり兵庫に
仲忠あんぞくひとりをり財産下のおほんの人く
鴨丹後よりあがりて酒のこを海沿よりある人の
沙金が事ゆくりいで一日内裏みくねりいてう
しなどりわれば天人をあれよい海じをしてそば
が世ふあるべうあれられあるひあふをせまに
きれをどいふ鬼とてめをもはるしすこるる武士おそ
こうしをぬぞなりあるもけふがらびいひさせでを
なんとくいふ武仲実しをいさうしがらくる年性
あていをや武士もあのかくるいりるはくを我ハぬす

うんとこぶにあそで仲忠いりにまの海えそれみさハし
といふうう仲忠わるうるあ兵ろん仲忠ばるを鳴り
あるあばくあうよいひそれだるこいてこだをあて
あるこにをりひ年ろれう中云をうをん仲忠ろいり
はるくあをとうね年へあのこもいでをこをきれう
失のあわすえをこでるるこれふあるこハひばの船ず
あれどをりとそいあはやをうるこをこいりををこん
とをふべといひあるをそれバいをあをきをしへやて
ふ雷の法毎下うり出をる武仲うけく車ようり
あるしてをるとしいをでと怠怖をせを船をうを

と仲正が所望の事ありけるに、なのみもたゝぬ田舎者にて、
もてはれもうけぬ田舎者にて、人を多くがけ事
城法ふつゝかなくもてなしたりけれども、俊実
いとゝ多くあるべきものかなひいんとぞ
時行わひしく侍いとゞ川あしくもてなさう
てぐりもてて仲正が許へめしてそなんといひそれば
仲正うく寄るべきものなりけるとぞいひあが
らひもひるれるまれば、そのよりけ事俊実こそ
所望の由をいとゝうとましくもいとゞうと
うの事はてゆまんやはいかゞ先しく仲正が所望

ぬ人をば先しくなれんとぞ
きびしく申ければ、俊実もさてまたと
よりて仲正もとうてまたうてまたき飛ぶ
あゝざりもれどゆるるあるべきとて怪ぶ
その命ぶをめしたあるべきとてうせぬ仲正が
ばざりもれば俊実めしてまゝひくを時賀を撥
那遠彼をすてゝ男を彼をばしりをば四うをばつる
男を命ゝくまのいとせをば作りまきれば
中くれがゆゝうれをばて母の尼公をあつまきを
ごとにうゝびをりの命を狂よあるをばゝ男を歸

の女はとぞうぞつくりくつをたくさん手ごこれ毎に入
あしじとあやしく先くゆゑてくさくさそ紙のよれば
ひやまくびの人のあさいあの海のまりくのあくを
似よ清くまりて手へとありてさうだそれがりと法
師をいりにとづきあいあくばりこのまるべけまてう
なくして狂へばくりりてきくとてゆてうらうくく
くあにめくかこふをひようぬ狂ありきれば
まづひかくくあめ和くくあふ雲をふあうこ波
屋よの形のに光雲屋くまこりをあくくをとて
うぐられんどおこの事よなりあんとふくまぐ法あり

法師をさうくあ女たくのあよつくりあくくそそくく
やりて田ごこのあをばくあくあくて紙屋を中路と
いふくこりまの高びあるてゆりてぐりこりきれば
光雲ゆくいうあくとふひくんあくあくくこぐるを
あこを河法水のたれおこりてひは寺けおをりあて
まぐ法よくくあ法ようひくくあ法ようくくこくくば
けりのくた別あふれまてくそかくあられぐくくひ
てあつまりひくくりていくたもを紙ぐくをふけまぐ
まづくりくてあくくくあれ中あくあ毎くう紙をくよ
つくりてさくあくくあ毎くいぐくあ毎まをまぐくくあ

作りんうきたにさくらをじとうくしつきハ梅あがせねよ
こそあれはあるつさ前書院へ弟書宣ことづけく重
ようを結文をふみてさ事ようをれべさのはい
いたるよあるらべそ御ゆりてぞりさ清貫院は
し先てく御よ歌じ芳野の桜のあこいめ
とらををれば何よういとく作りん切りよさとドさろ
を作実も遣時あるるべ実のやうに
めさ面りを器さに作実がりとり
切さてべてくれたりてさるんやと作ゆされ名れば
和宣文のがれてくて作ゆて出さ面よ小面より

安名がはるるれいざあへ人れりこへ酒のこにはるる
ふこをなひまへりてせそひそりはのさり梅ゆれば
ようあんぐおるくれいづくれるんとるれよび
作実がりをにあさ事のつあぐつりいてさ歌く
の事へれあるをさでひる程よ加ぬあるど酒丸
知くの面をる程よれを人を無よへくあるどり
ようるあさそてをそれ面のあて左いどりて
ようてあくふる面をして名ひとつれかて
いみどれあやまりとりてさりだあぐくそを見ればめぐり
れりくはそて名がとを見ようをる安名り

同じくハせをれだに時よこの俳人のうめよりあくさえて
ひさうのもんかくぎり望をゆくしたあやうしきうろ
つゝぬうりてあそれうるあたく事とてあきび俳の
ありてびうしゃかてそれば俳人のあふおがうて作りつ
と蓑しをれば人あてうれどとそうびまめまで
けまた俳人をうんだしあれば蓑をゆ巖をへと作をを
て仲びが蓑ありく加りよりかをを天作実人あううひ
うあうにくあはしあうさうう人をうひうれどはて
のうるたりうを財花園のおくいあうう自をあうく
ありあ前よりみの昨よて敷ひとびひうるああり

きうるいとあのうたにもどれうる変えもあうりを藤あや
以作実人蓑園取ふありくあ神をうきうはをよは文結の
はうん鏡人作実もあうれうづき抽紙敷ひあうをとあて
をとうりをそうれがあ作りたを書つうう学人うれだ
んひがあしあがうしあがうう藤羽よあひをうひ作をあをよや
ふひうをんあやをうんいうでは秀句をうそ作くは作れとや
をれば真五を事うれいうたとあのあよ
有花とく敷ひとく書農紀とやをれいあるが
の西をうりを作ひくいみがは秀句へと威が作をれば
ゆしくあ前よをうりくいあハは敷ひハ鼻の前作はよ

て御りをる成れとづさてくかをそへぐり原の御ごうろに
はかどこれば教盛が家こうをる氏は貴とうてせまの
めたよいりてう失とうる方めくして仲忠うやうに
用まるとせ川ぐく作きたこう年方ふ似ぬうどさへ以下
白をてて貴はめをて

寄るこ作実国ノ五年二月白とそ中こうをる

取いこどくかんど作きる世の人こ時の物ごうにくそ
まをるまこぶを切うまてそれみもこうど形利ドー
あ月紀ろ狩よまこ付られおをりさなん
後後藤の時の時亀山天皇の時の法令宰相義忠

はこ月不住法眼とんむりよりお知者まてあをるに
亀山殿の寵不むりひあもせまてあをればあるゆふ
りあひくあそびるに義忠の家性が喜へ切の思ひ
をるあうんが名成人をうて小紬びゆくえ出て門をへた
して家性法眼めあやまをくもたあめくいひく孫を
のがりをれば家性とりをあへぐ簡の中より義忠の
もあやまをくとそいひるをて法よりあひく雑
袴酒裏をどをけるとあや知者まの法事やは作ごさ
人の利に為てまをるゆんの家性法眼へ思ひくある
尾をとうてひて拾うり同家人ものごうすが同

不ふかとそで中一百とかとそでぞ出いるひるの孔
ちてて成名の時ハひろの中ゆもまへ成名さあけて言す
えんの中佛弟子ありて・弟子といひく尼がりをも
あ西こりをれば尼をもあつぞえまへとをもけて
三百の西の中堂西ひとをもひとをもてまいりひとをもく
中の間へ引合てそで免をるとえん巳の巳
摂ょ漏尉慈悲士事ゆ親といふ着をもり周易清士
ゆくを道ふ西へをれど風月のかをとなる
中のえをりをりはるみ家の書百の花ゆのぞをう
をるにより百の裏ふゆ弟子りてゆくゆれば中よ

ひとの儒えのをもをるがそ成ゆをづりくゆりをるゆん
閑に後来容
くよるをとそでゆていひりをれバ事釈
倉法先達儒
ひそで付をりをるの儒えゆ西のをすゆりをりをも
利日のをこりをるゆくゆ
答孫西答梨と中の一人ゆるれを恐うるをん慈
恵僧正と盛仏肉食の人をより不実利日をや
しりをる式僧正ゆかりをりをれていをど成りて超綺文
を書て三法よ拙事をりを間の云

若謂令被戒無慙之僧住持天台座
主者恐貽疑於先賢方致狼籍於
後輩者欲固茲今對三寶披陳此事
抑律の人よそゝ律付ゝ乱むらるゝ
ゆうさを爲とゞて好清のなりまれ

古今著聞集巻之十六終

内閣文庫